

高岡町埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集

高岡町内遺跡Ⅲ

1995. 3

宮崎県高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書第8集

高岡町内遺跡 III

1995. 3

宮崎県高岡町教育委員会

高岡町内遺跡Ⅲ発掘調査報告書正誤表

頁・行	誤	正
27頁 表-4 No.6	第13Tr上層 (鱗21)	第1Tr上層 (鱗21)

序 文

高岡町は、宮崎市の近郊に位置し、大規模な諸開発の増加が予想されます。高岡町教育委員会では、これらに対応するため、調査体制を整えるとともに、1991・1992年度に実施した町内遺跡分布調査の結果をもとに、開発に伴う遺跡の確認を目的とした町内遺跡発掘調査を実施しております。

本書は、1994年度に実施したそれらの調査の報告であります。この調査が、開発と埋蔵文化財保存とが共存できるきっかけとなることを希望します。

最後に、調査に協力頂いた諸関係機関や地権者の方々に深く感謝申し上げます。

1995年3月

高岡町教育委員会

教育長 篠原和民

例　　言

1. 本書は、高岡町教育委員会が文化庁・宮崎県教育委員会の補助を受けて実施した町内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 高岡籠遺跡周辺調査では、土田充義教授（鹿児島大学工学部）から指導・助言を受けた。また、穆佐城跡出土陶磁器については大橋康二氏（九州陶磁文化館）から助言を受けた。
3. 本書 I-1-a の執筆は、合原敏幸氏（高岡町役場）による。
4. 調査は下記の体制でおこなった。

調査主体　高岡町教育委員会

教　育　長	篠原和民
社会教育課長	岩崎健一
社会教育係長	本田正雄
庶務担当	社会教育係主査　丸山閑子
調査担当	社会教育係主事　島田正浩
	社会教育係主事　山本賢一朗

調査指導　県文化課主査　永友良典

5. 調査ならびに報告書作成にあたっては、[] (以上同様
埋蔵文化財調査室) の協力を得た。
6. 本書の編集は島田がおこなった。



図版 1 作業風景

目 次

Iはじめに	4
1 高岡の環境	4
a 地形的環境	4
b 歴史的環境	4
2 調査の目的	6
a 高岡の開発について	6
b 今年の開発事業について	7
II調査	8
1 東高岡地区	8
a 城ヶ峰遺跡	8
2 高浜地区	10
a 香積寺跡	10
b 大ノ丸遺跡	11
c 鍋山遺跡	11
3 浦之名地区	12
a 一里山第1遺跡	12
4 飯田地区	13
a 高岡麓遺跡	13
b 朝羽田・角ノ園遺跡	15
5 穂佐地区	18
a 穂佐城跡	18

挿 図 目 次

第1図 高岡町内遺跡分布図	5	第9図 飯田・井上地区調査位置図	16
第2図 城ヶ峰遺跡調査位置図	8	第10図 穂佐城跡周辺図	18
第3図 城ヶ峰遺跡第2地点出土遺物実測図	9	第11図 穂佐城跡トレンチ配置略図	19~20
第4図 高浜地区遺跡調査位置図	10	第12図 曲輪28トレンチ図	21
第5図 鍋山遺跡調査位置図	11	第13図 曲輪5トレンチ図	22
第6図 一里山第1遺跡調査位置図	12	第14図 曲輪21トレンチ図	24
第7図 高岡麓遺跡周辺図	13	第15図 曲輪10トレンチ図	25
第8図 高岡麓遺跡調査位置図	14	第16図 穂佐城跡出土遺物実測図	26

図 版 目 次

図版1 作業風景	2	図版15 穂佐城跡全景	18
図版2 鍋山遺跡トレンチ	11	図版16 堀切りI	18
図版3 一里山第1遺跡重機掘削	12	図版17 帯曲輪北側	21
図版4 高岡麓遺跡第4地点トレンチ	13	図版18 第16トレンチ	21
図版5 第3地点から南をみる	13	図版19 第17トレンチ	21
図版6 第3地点から御飯屋跡周辺をみる	13	図版20 第17トレンチ	21
図版7 第1地点全景	15	図版21 第19トレンチ	23
図版8 第1地点トレンチ	15	図版22 第20トレンチ	23
図版9 第2地点全景	15	図版23 第21トレンチ	23
図版10 第2地点トレンチ	15	図版24 第21トレンチ	23
図版11 第3地点全景	17	図版25 第1トレンチ	24
図版12 第4地点トレンチ	17	図版26 第1トレンチ	24
図版13 第5地点トレンチ	17	図版27 第3トレンチ	25
図版14 第6地点全景	17	図版28 第5トレンチ	25

I はじめに

1 高岡の環境

a 地形的環境

高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四五十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ1m~2mのチャートが見られる。

高岡山地西部には、古第三紀の四五十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。

高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四五十累層群を傾斜不整合に覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。

さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の疊、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に疊、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や緩斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。

b 歴史的環境

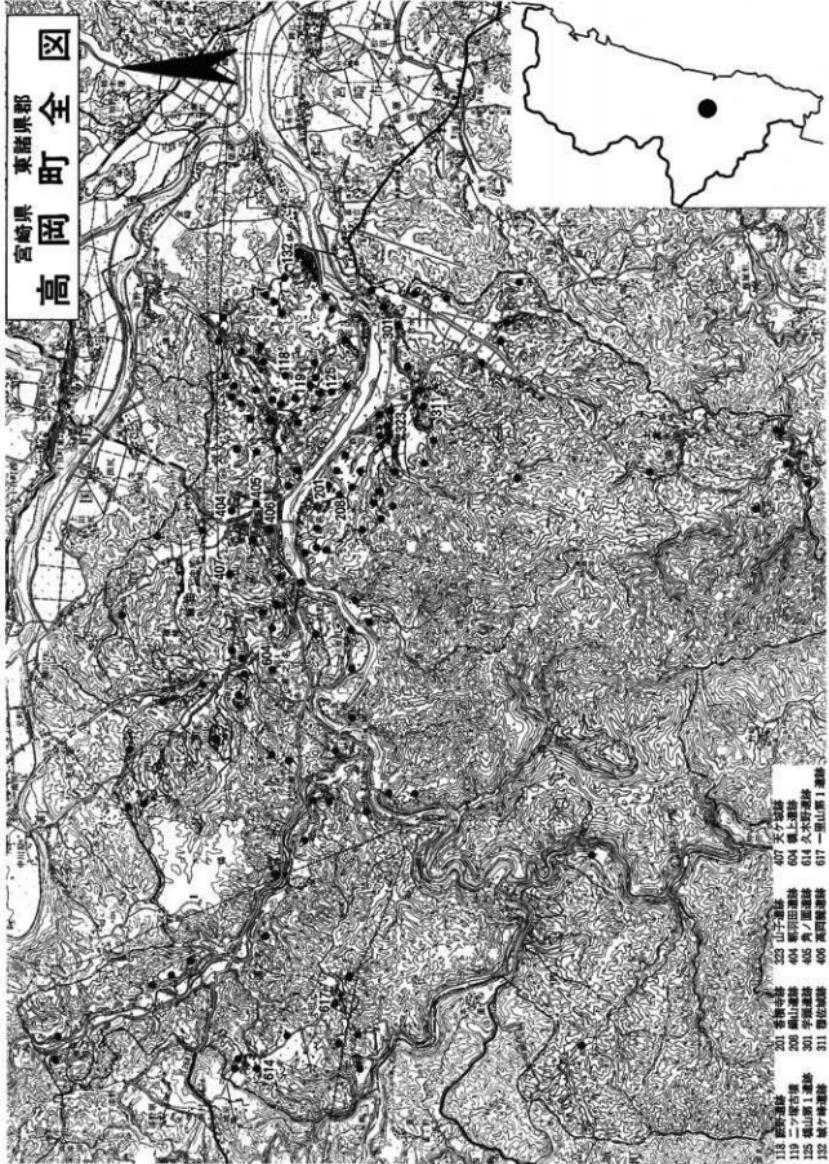
70%以上を山林が占める高岡町は、東に位置する宮崎平野と西に広大に広がる標高170m以上の台地に挟まつたところに位置し、狭い沖積平野や谷や小丘陵に生活の基盤をおいている。このような山々や丘陵などを含めた大淀川に起因する地理的条件は、その時々の人々が活躍するための歴史的要因である中のひとつである。

高岡町の遺跡は、現在知られているだけで140箇所あり、それらの遺跡のほとんどは、町中央を東流する大淀川やその支流（内山川・浦之名川など）により形成された河岸段丘上に位置している。

旧石器時代では、表探資料として浦之名一里山地区の剥片尖頭器がある。また、昨年調査を実施した向屋敷遺跡は、集石造構と共にナイフ形石器やスクレイパーが出土している。

縄文時代の遺跡は、密度の差こそあれ、河川流域の小丘陵には必ずといってよいほど存在している。特に早期と後期の遺跡が多く知られており、早期は、柑橘栽培による造構面の擾乱を受けることは少なく、残存状態も良好である。橋山第1遺跡・天ヶ城跡・宗栄司遺跡・橋上遺跡・久木野遺跡の5遺跡で、すでに発掘調査が実施されている。橋山第1遺跡は、早期と後期初頭の造構遺物が検出された。早期は、幾型式かの集石造構と、それに伴い、岩本・前平・塞ノ神式等の貝殻文系円筒土器や押型文土器、そして環状石斧が出土している。後期は、凹線文土器が出土している。また、多くの石錐が出土しており、当時の生活環境を知りうることができる。天ヶ城跡は、標高120mの独立した丘陵に位置し、集積造構に伴い押型文を中心とした早期の遺物が出土している。また、九州一円からの黒曜石やサヌカイト製の製品が出土し、交易の広さを知る手がかりとなる。表探資料からは、山子遺跡が以前から知られており、浦之名川上流に位置する赤木遺跡と同様に後期の貝殻条痕文土器が表探される。

弥生時代では、学頭遺跡があげられる。学頭遺跡は複合遺跡であり、時期は中期後半から終末までが確認されている。河川に挟まれた舌状の微高地に位置する生活遺跡である。また、城ヶ峰遺跡では、後期の遺物が出土している。



古墳時代では、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心として遺跡が広がっている。久木野地下式横穴墓群で3基の調査が行われており、1984年の調査では鉄斧と玉類が出土し6世紀前半とされている。東高岡地区的古墳は未調査であるが、その中のひとつ高岡古墳周辺で古墳時代中期の壺と鉄製品（鉄斧など）が耕作中に発見されている。また、学頭遺跡では初頭～前期にかけての遺物が出土し弥生時代から引き続き集落が営まれている。それに隣接した八児遺跡でも住居跡が検出されている。

古代は、文献によると高岡周辺は「穆佐郷」と言っていた。古代になると、宗朱司遺跡・蘇野遺跡・二反田遺跡があり前者2遺跡で調査が行われている。蘇野遺跡では、9世紀後半の土器生産に伴う焼成土塙（窯）が検出されている。

中世では、12世紀に「島津庄穆佐院」といわれ、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の興亡の歴史の中に入していく。この時代の代表的なものは山城である。南北朝期は、穆佐城が日向の中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった。それ以後、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。穆佐城は、三股院高城・新納院高城とともに日向三高城と称されているところである。網張り調査の成果として、南九州特有の特徴をもつとともに、機能文化をもたらした山城として評価されている。その後、穆佐城は、島津久豊（8代）・忠国（9代）の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど両氏の勢力争いの表舞台にあった。また、このころには、山城などの城郭遺跡以外でも町内全体に数多くの遺跡が広がる。

この時期までの中心地は穆佐城周辺だったのに対して、近世になると天ヶ城周辺に一変する。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の据地に多くの郷士を居住させた。そして、綾・倉岡とともに閑外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として薩摩藩の東側の防衛の要として発展する。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷土屋敷群と町家群に分割されている。そして、第1次調査における町屋の調査で素堀の井戸や土塹等を検出し、大火跡と思われる焼土層を確認している。また今年度の県文化課による調査では、武家屋敷の一画を調査し陶磁器類を検出している。近世の遺跡は、麓を含めて現在の居住地と重なる場合が多く、表探遺物や石造の墓標の存在からも参考となる。

2 調査の目的

a 高岡の開発について

高岡町は、宮崎市の近郊に位置しているにも関わらず大規模開発というものに縁遠いところである。地理的に好条件であるわりには、宮崎市の南北に位置する佐土原町や清武町のようにベットタウン化されることはない。そのような開発の遅れは、法的規制によるところが大きく、それがかえって現況を破壊されることなく、埋蔵文化財にいたっては残存している遺跡が多い。しかしながら開発がなかったわけではなく、確実に遺跡は破壊されてきたのである。まず戦後的小規模な圃場整備や1965年頃始まったパロット事業、そして、国道10号線バイパスを始め各種の舗装道路、官公庁の庁舎建設、民間では、小規模な宅地造成や個人の農地造成、農作物の栽培での蜜柑やごぼうなどの深耕を必要とするもの。また、近世の中心遺跡の場所に教育委員会施設であるR・C構造の校舎建設がある。

これらの開発は、埋蔵文化財に対する保存の意識はまったくなく、あくまでも生活利益先行の結果である。これは、文化財保護法を施行させるための体制がなかったために、宮崎県内でそのような体制づくりがなされたのがひと昔前と考えれば、市町村レベルにおいての意識の低さは当然であろう。

さて、最近の町内の傾向は、まず、大規模開発は、ゴルフ場や工業団地造成などが計画されたが、

民間開発のほとんどは法的規制や景気の低迷などで計画の見直しを余儀なくされている。小規模開発については、公共事業を中心に毎年コンスタントに事業が計画されている。町の単独事業は事業費が少額で、地下造構に影響を与える内容の事業のほとんどは補助事業である。個人住宅に関しては、表-1のとおりである。街路事業の影響による住宅の立て替えが多い。

これらの開発に対しては、可能な限りの試掘と立ち会い調査で対応し、破壊される遺跡については本調査を実施している。しかし、これも事前に計画が確認できるものについてのみの対応であり開発のすべてではない。現在のところ特に小規模な民間開発においては把握するのは困難である。教育委員会で把握できるものは、開発申請や建築の確認申請、そして農地転用許可によるものであり、それ以外の開発は発見時での対応となり工事の中断・工期の延長を引き起こしている。公共事業においても計画段階で協議を求めてくるのは希である。発掘調査が事業者側に課せられた義務であることを周知徹底させることと、開発に対する埋蔵文化財独自のチェック機構を早急に確立せることが必要である。また、仮にこのように開発の把握が可能になった場合、今の教育委員会の体制では対応することは困難であり、同時に受け皿の強化を図らなければならない。

b 今年の開発事業について

今年度は昨年の状況と比べてさほどかわらない。公共事業は、農業関係を中心に小規模ながらおこなわれ、道路新設等が目立つ。民間については、まず、大規模開発の実施が延期されるなどして目立った動きはない。個人住宅にしても横ばい状態である。今年度の対応としては、区画整理事業など長期にわたる開発等に先行するかたちで確認調査を実施した。

表-1 高岡町内建造物建設件数

		平成6年度	
構 造	木 造	遺 跡 内 件 数	2 1
		総 数	5 7
R・C 鉄 骨	遺 跡 内 件 数	4	
	総 数	1 3	
合 計		遺 跡 内 件 数	2 5
		総 数	7 0

表-2 確認調査一覧表

試 掘 調 査	遺 跡 名	主 体	原 因	期 間	成 果	備 考
	城ヶ峰遺跡	町教委	個人建物	4/11~4/13	縄文~古墳時代 遺物	
	穆佐城跡	"	史跡整備	4/25~4/28	陶磁器類	
	一里山第1遺跡	"	町道改良	H7 5/24・2/1	弥生式土器	
	香積寺跡	"	施設建設	10/28	墓石	
	大ノ丸遺跡	"	施設建設	12/1		
	鍋山遺跡	"	鉄塔建設	H7 1/11・1/12	焼礫	
	角ノ園遺跡 朝羽田遺跡	"	区画整理	H7 1/17~2/7	土師器 陶磁器類多數	

II 調査

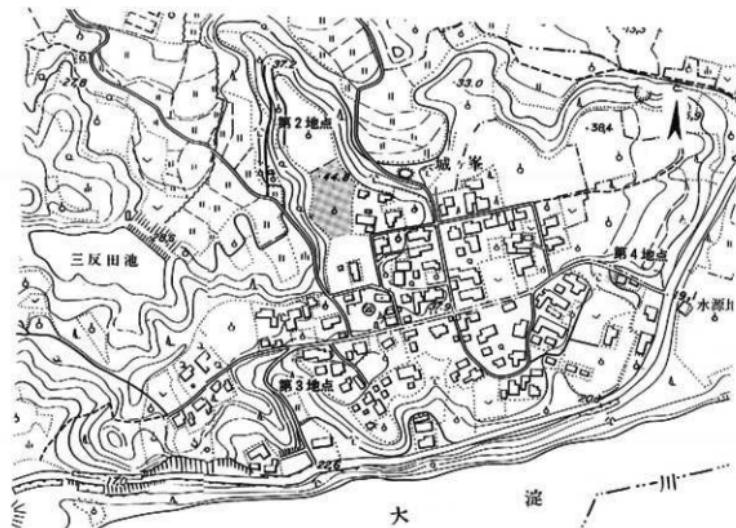
1 東高岡地区

a 城ヶ峰遺跡

城ヶ峰遺跡は、高岡町の東端に位置し、大淀川を眼下に望む台地一面に広がっている。明治35年に宮崎県で初めて発見されたとされる花見貝塚（城ヶ峰貝塚）や高岡古墳（県指定）はこの遺跡の一角にあり、県内でも重要な遺跡のひとつである。1992年にこの遺跡の試掘調査（第1地点）を実施して以来、すでに3箇所で試掘調査を実施している。何れも個人住宅等の建設に伴うもので、ある程度の造成（整地）を含んだものが多い。

第2地点

遺跡北側に位置し、やや南方向になだらかな傾斜を見せる畠地である。敷地内に1.5m×8mのトレンチを3箇所設定して掘削した。層位は、耕作土、アカホヤ火山灰土、カシワパン相当層、淡黄褐色土となる。すべてのトレンチにおいて、表土を剥いだ段階で遺物が出土したが、遺構



第2図 城ヶ峰遺跡調査位置図

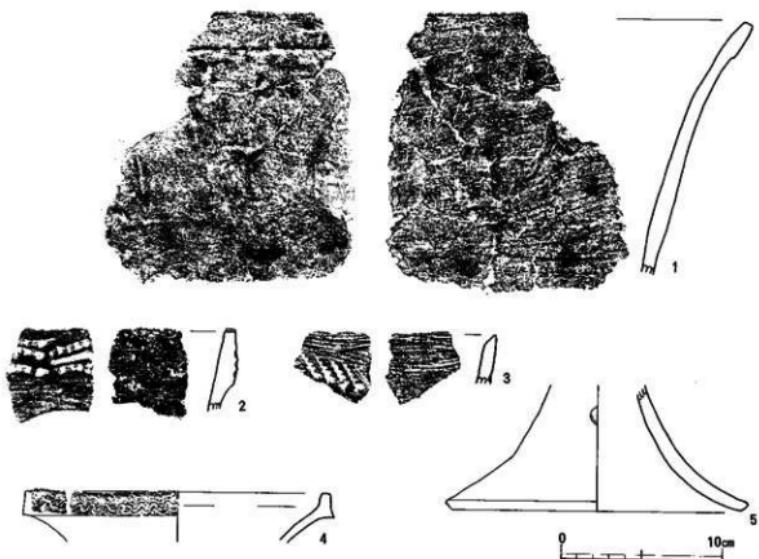
の痕跡は、全く無かった。また、そのうち2箇所で深く掘削し、両方のトレンチで淡黄褐色土面に集石遺構を確認した。遺物は、縄文後期から古墳時代までのものが多く出土している。

第3地点

遺跡南西側に位置し、森林状になっているところである。トレンチは、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ と $2\text{m} \times 1\text{m}$ の2箇所を設定した。層位は第2地点と同じで、トレンチ $2\text{m} \times 2\text{m}$ の表土から弥生後期から古墳時代にかけ

表-3 城ヶ峰遺跡第2地点出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量(cm)			色調	焼成	胎土	文様調整
			口徑	底径	高				
1	縄文式土器	深鉢	—	—	—	④5YR 5/4 に似る赤褐色 ⑤7.5YR 5/4 に似る赤褐色	堅	透明粒 白色粒 淡白色粒を含む	④貝殻条痕
2	縄文式土器	深鉢	—	—	—	④10YR 7/4 に似る赤褐色 ⑤10YR 7/4 に似る赤褐色	堅	半透明粒 茶色粒を含む	④貝殻条痕 ⑤ヘラによる 連続刺突文
3	縄文式土器	深鉢	—	—	—	④7.5YR 6/6 横 ⑤5YR 6/6 横	堅	白色粒 黒色粒を含む	④貝殻 条痕 ⑤貝殻刺突文
4	弥生式土器	ツボ	18.8	—	—	④10YR 7/4 に似る黄褐色 ⑤10YR 7/4 に似る黄褐色	堅	半透明粒を 少し含む	④ナデ ⑤クシ彫波状文・ナデ
5	弥生式土器	高杯	—	18.0	—	④7.5YR 7/5 横 ⑤7.5YR 7/4 に似る横	堅	半透明粒を 少し含む	④ミガキ ⑤ミガキ



第3図 城ヶ峰遺跡第2地点出土遺物実測図

けての遺物が出土した。

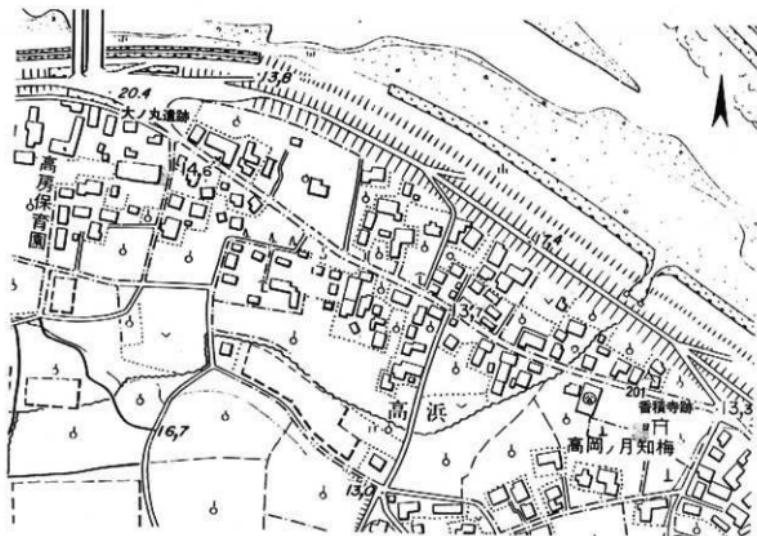
第4地点

遺跡南東側の谷に下るところに位置する。ここは、埋土が深く掘削が困難なため重機を使用した。トレンチは2m×10mを設定したが、掘削途中で旧整地時の石垣が露呈したため6mに変更した。すぐにシラス土となり、そこから谷を横切る溝状の落ち込みが検出されたが、溝の埋土や出土状況から台地部からの流れ込みであるという結論となった。

2 高浜地区

a 香積寺跡

この寺は、龍福寺（禪宗）の末寺で江戸時代の開山である。現在は、寺院の痕跡はなく当時から敷地の一角にあった月知梅の名だけは、広く知られている。調査の原因は、観光用施設の建設に伴うもので、予定地内に1m×7mのトレンチを設定した。約40cmの整地層を掘削し地山を確認したが、地山面から墓石が検出された。調査地の隣は新しく墓地造成をしたところで、検出された墓石は、旧墓地にあった墓石が排斥され無造作に埋められたものと思われる。遺物は出土



第4図 高浜地区遺跡調査位置図

しなかった。

b 大ノ丸遺跡

この遺跡は、高浜遺跡より北側の大淀川沿いに位置し、周知の遺跡ではないが遺物の散布がみられるところである。調査はたかふさ保育園の増築に伴うもので、所轄横の駐車場に $1\text{m} \times 6\text{m}$ 程のトレンチを設定した。土層は、整地土下は暗黄褐色砂性土 (20cm) となり、その下に灰色混じりの淡褐色砂性土がかなり深く堆積する。土砂は部分的に粘土っぽくなるが全体的には砂性が強く大淀川の氾濫によるものであろう。遺物は、陶磁器が数点出土している。

c 鍋山遺跡

この遺跡は、大淀川の南側の台地に位置し、縄文後期から中近世の土師器等が散布している。調査は、N・T・Tの無線基地局建設に伴うもので遺跡の北西にあたる台地の端500m内に $1\text{m} \times 14\text{m}$ と $2\text{m} \times 2\text{m}$ を2箇所の合計3箇所のトレンチを設定した。調査地は、アカホヤ下面より約50cmほどまで造成により削平されており、地表面に焼跡が露呈していたため遺跡は破壊されたものと思われた。表土下に高岡でみられる縄文早期包含層からその下層への漸移層 (V層) があり、黒色ブロック混じりの淡黄褐色土 (VI層)、鈍い黄褐色土 (VII層)、そして地表面から1m程でシラス土 (VIII層)となる。1m×14mのトレンチの両側をシラス土まで下げたところ、VI層とVII層から礫片が出土したほか、VI層下から焼跡が2点出土した。また、2m×2mのトレンチからも、同じくVI層とVII層から礫片が出土した。



図版2 鍋山遺跡トレンチ



層序
漸移層
黒色ブロック 混じりの淡黄褐色土
にぶい 黄褐色色土
白灰色土 (シラス)

第5図 鍋山遺跡調査位置図

3 浦之名地区

a 一里山第1遺跡

この遺跡が立地する台地は、そのすべてに何らかの遺跡が存在する。今年度は、昨年度の確認調査をもとに、この遺跡の北側に位置する久木野遺跡内（614）で農道新設に伴う発掘調査が実施されている。一里山第一遺跡では、2年前から町道拡幅による改良工事が実施され、今年度工事では拡幅部分が面的に広がるため、5月と2月に確認調査を実施した。調査地は遺跡内の町道沿いで、5月調査時は4箇所と2月調査時は3箇所の合計7箇所のトレンチを設定し、一部重機を使用するなどして対応した。層位は、表土下、アカホヤ（上部は2次アカホヤ）、カシワバン相当層、暗黄褐色土層となる。5月調査地の西側は、重機を使用し町道に沿ってバケット幅で掘削し、深さ約2m程でアカホヤ面が検出された。遺物は、弥生土器片（ツボ）1点が出土した。また、2月調査地では、1.5m×4mのトレンチ掘削で、表土から弥生土器片が出土している。しかしながら何れのトレンチからも遺構は確認されなかった。



図版3 一里山第1遺跡重機掘削



図6図 一里山第1遺跡調査位置図

4 飯田内山地区

a 高岡麓遺跡

高岡麓遺跡は、天ヶ城に対する麓ということで近世を中心とする遺跡であり、1991・2年の鹿児島大学工学部による調査で屋敷割りや街路等の復原が試みられている。考古学的には、地形が大淀川の氾濫源に位置し弥生時代等の遺跡の存在も予想されていたが、表探資料からは、中世まで遡るのが限度でその可能性も色あせていた状況であった。しかしながら、今年県文化課が実施した郵便局建設予定地（第5地点）における調査では、古代や古墳時代の住居址を含む遺構・遺物が多く出土し、複合遺跡としての性格が明確となった。

第3地点

調査地は内山神社の裏斜面で、この内山神社がある一帯は当時高福寺があったところで、斜面東側は墓地となっている。斜面の頂上に立つと内山神社正面から大淀川に延びる街路が一望でき、ここは、麓設計上たいへん重要なポイントであったであろう。宅地造成予定地内に設定したトレーニーからは遺構遺物は確認されなかったが、高岡麓形成の重要な場所がまたひとつ消えていくことは残念である。

第4地点

調査地は高岡麓の西側大淀川沿いに位置し、郷士の屋敷が建ち並んでいた一角である。北東側に



図版4 高岡麓遺跡第4地点トレーニー



図版5 第3地点から南をみる



図版6 第3地点から御仮屋跡周辺をみる



第7図 高岡麓遺跡周辺図

第8圖 高岡鐵道路線位置圖



は龍福寺跡があり現在墓園となっている。調査原因は、病院の建て替えで、敷地推定地を中心に3箇所のトレンチを設定したが、以前の建物がR・C構造のため地下構造のほとんどは破壊されていた。

b 朝羽田・角ノ園遺跡

高岡城跡第5地点の調査で、遺跡の範囲がその周辺に広がっていることが予想され、その東を流れる飯田川流域に位置する朝羽田、角ノ園の各遺跡周辺においても同じような状況が考えられる。現在それらの遺跡を包括するような範囲で区画整理事業が進められ、これからも宅地化が進み諸開発が多くなると考えられる。教育委員会では、これらに対応するため遺跡の範囲確認等を中心とした確認調査を実施した。今年度は、7箇所でそれぞれトレンチを設定した。調査地は、第9図のとおりである。

第1地点

藩政時代に処刑場とされた小高い丘の東隣で、今回の調査では一番北側にある。1m×15mと2m×2mを3箇所の合計4箇所のトレンチを設定した。表土と整地土を剥ぎ、浅い砂粒混じりの淡青灰色粘性土の下で遺構を検出する。この浅い砂粒混じりの淡青灰色粘性土がこの盤と思われる。他の調査地点もそうであるが、通常の硬い盤というものは存在せず、明確な盤と言える面がない。多分この辺りの水田の特徴であろう。東側に設定した2m×2mのトレンチでピットが検出された。遺物は、陶磁器が数点出土した。

第2地点

第1地点から延びた微高地の一角に位置する。2m×2mのトレンチを13箇所設定した。層位は、南側のトレンチでかなり厚い淡橙色粘土の盤らしき層を表土と鈍い白灰色粘土の下で確認した。その下は、淡青灰色粘土が深く堆積し、中央トレンチでは、その面から青灰色粘土を埋土とする落ち込みを検出した。遺物は、瓦質の鍋片が出土している。

第3地点

調査地は、町営住宅の南入り口前の水田である。2m×2mのトレンチを合計6箇所設定した。こ



図版7 第1地点全景



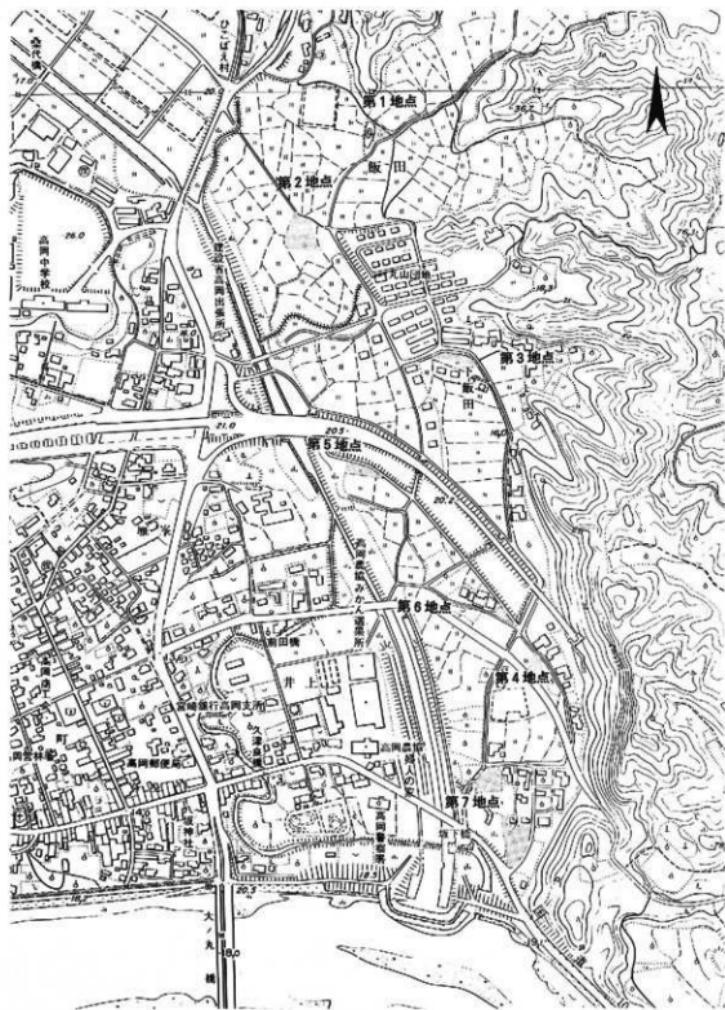
図版8 第1地点トレンチ



図版9 第2地点全景



図版10 第2地点トレンチ



第9図 飯田・井上地区調査位置図

の水田は湿田で掘削途中ですぐ水が湧くという悪条件下での掘削であった。層位は、表土下で、西側のトレンチでは高岡麓遺跡第5地点の遺構検出面と同じ面が確認されたが、東側のトレンチでは今回調査の第2地点掘削時の面と同じであった。遺構はピット1基のみであったが、遺物は土師器片が出土した。

第4地点

国道10号線沿いの畑地に1.5m×1.5mのトレンチを5箇所設定した。層位は、表土下に淡白青灰色粘土と淡橙色粘土（盤）が3度重なっており、その下に淡青灰色粘土、暗青灰色粘土と続く。遺物は、淡青灰色粘土まで出土し、暗青灰色粘土からは出土しなかった。特に淡青灰色粘土からは、軽石が多量に出土し大淀川氾濫時の水位の目安となる。

第5地点

大淀川と飯田川に対する東側に形成された微高地の先端に位置する。2m×2mのトレンチを8箇所設定した。表土（整地土含む）下は、高岡麓遺跡第5地点の遺構検出面と同じ面が確認され、その下、上層より淡い粘土、そして淡青灰色粘土と続く。遺構はピットや溝状遺構など時期はわからないが検出された。遺物は、陶磁器や土師器、そして鉄滓等が出土した。

第6地点

第4地点の西側で2m×2mと1m×4mの合計4箇所のトレンチを設定した。層位は、第4地点とほぼ同じである。遺構は、西側トレンチから落ち込みが確認され、遺物も軽石をはじめ陶磁器類が出土している。

第7地点

「坂ノ下」の集落周辺で大淀川の縁辺にあたる。トレンチは2m×2mを7箇所、1m×4mを1箇所の合計8箇所設定した。トレンチでは、40cmほど砂性土が堆積し、粘土がその下にある。南側のトレンチは、表土下大まかに3層に分かれるがすべて砂性土で近時の堆積土であろう。遺物は、陶磁器、土師器が出土している。



図版11 第3地点全景



図版12 第4地点トレンチ



図版13 第5地点トレンチ



図版14 第6地点全景

5 穂佐地区

a 穂佐城跡

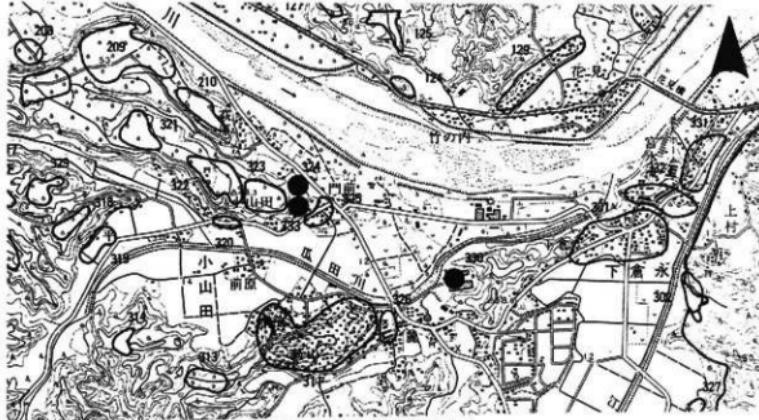
穂佐城は、南北朝期から存在する中世山城である。穂佐城が立地するところは、大淀川沿いの低丘陵である。丘陵は、東西に主要な尾根を持ち、西側に険しい山々と東側に小河川からなる谷が入る。北側は、大淀川に面し、倉岡城と糸原の平野を望む。城域は、東西両端が北側に突出し、中央が南側に懐深く構えている。この山城の比高差は50m弱で「平山城」に分類される。面積にして約11haで丘陵の大部分は平坦地が広がり曲輪群を形成している。城域の南側にある曲輪群（B・C）は高低差1m前後の段を造って区別し、その集合体としてひとつ大きな曲輪としている。東端の曲輪群（A）は、小さな掘を入れ込ませ小規模な曲輪の集合体としてひとつの大きな曲輪としている。また、西端の曲輪（D）はひとつの広い曲輪に横堀や土塁を設け、他の曲輪群からなるものと比較すると異質である。このように曲輪群内の曲輪の規模や配置の違いは、その集合体としての曲輪群個々の性格（機能）の違いを予想する。しかしながら、この城館においてはこれらの曲輪群を防御するために大規模な堀切りを入れており、このような大規模な曲輪を深い堀で分け独立性を持たせる手法をみる限りでは、南九州の特徴を持った城館であろう。この城の主郭は、曲輪群Bと中の曲輪7を中心とする辺りで、大規模な堀切りと高い土塁を巡らせる等は、他の



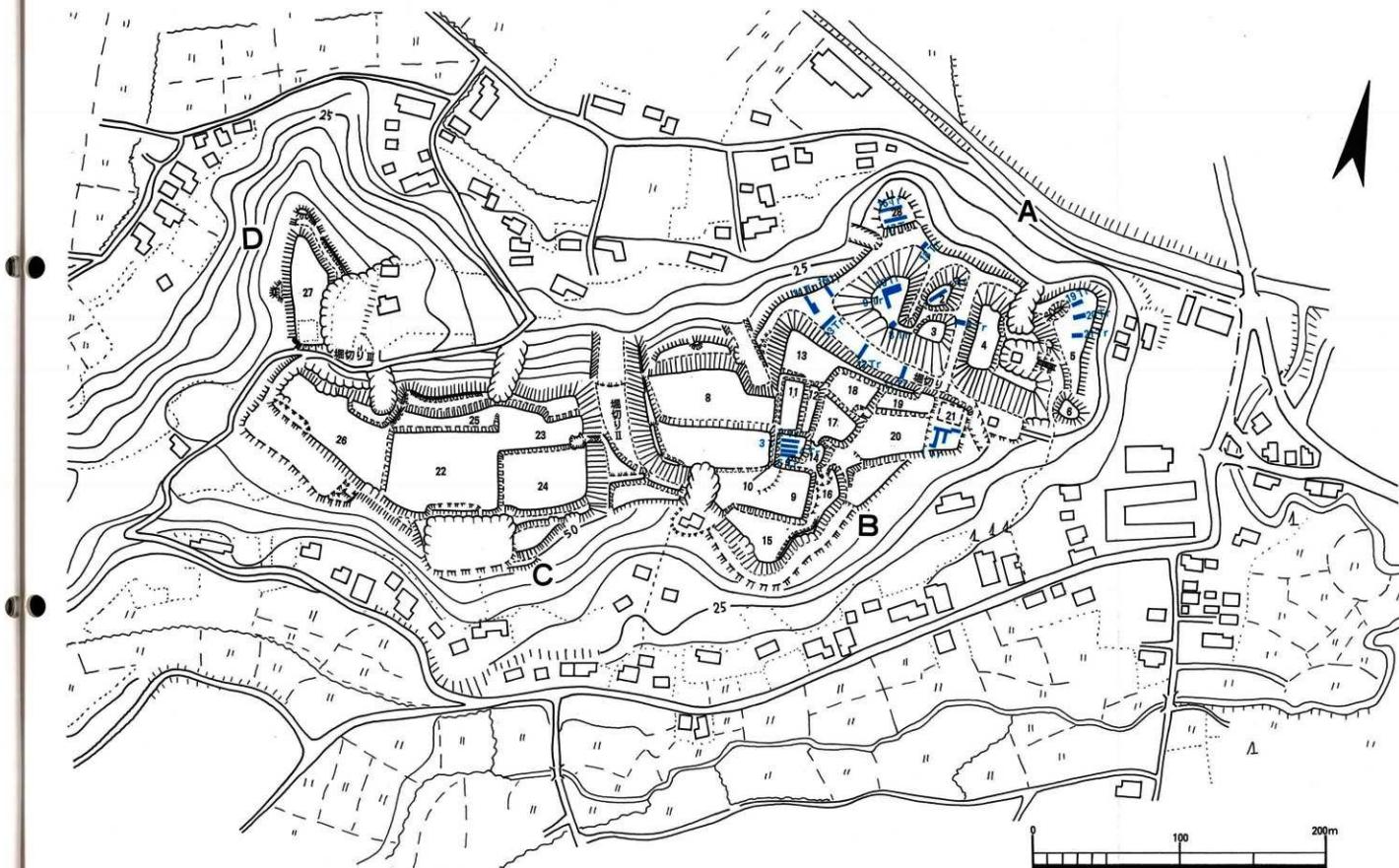
図版15 穂佐城跡全景



図版16 堀切りⅠ



第10図 穂佐城跡周辺図



第11図 穂佐城跡トレンチ配置図



図版17 帯曲輪北側



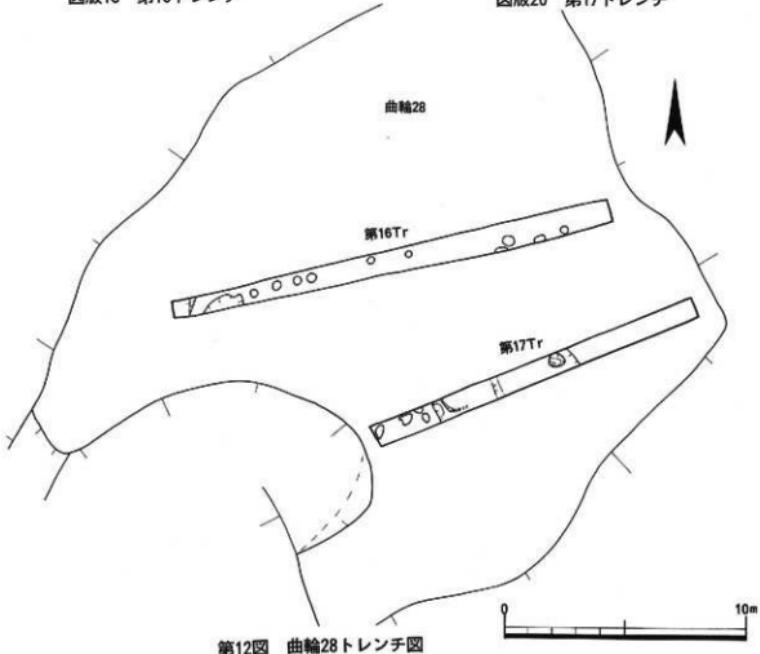
図版19 第17トレンチ



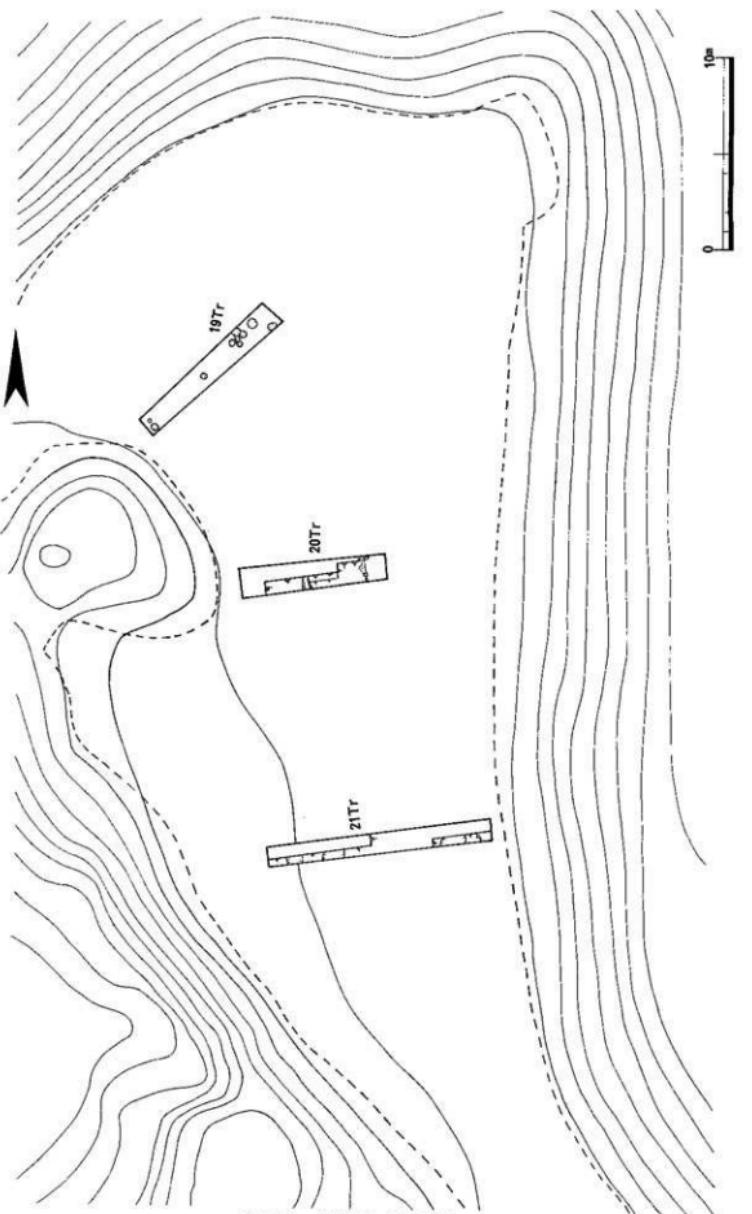
図版18 第16トレンチ



図版20 第17トレンチ



第12図 曲輪28トレンチ図



第13図 曲輪 5 トレンチ図

曲輪と比較しても防御性に優れているといえる。この大規模な堀切りは、幅35m前後を計り堀底までかなりの急勾配を持つ。堀底は通路であり曲輪への入り口でもある。曲輪群B・Cの間の堀切りの底は複雑化され、そのような行為は曲輪群B・Cの重要性を予想させる。さらに、曲輪群B・C内の各曲輪面積が比較的広く、居住空間として他の曲輪と比較してもその優位性は明かであり、そのようなことからもこの城の中心と考えられる。文献によると、「城」として表現をしている最初の文献は、『旧記雜錄』にある建武3年2月7日「土持宣栄軍忠状」である。「城」という概念がどれほどのものか分からぬが、南北朝期という時期は他の城館を見る限り妥当なところではなかろうか。

トレンチ調査は、町有地である約2.7haを中心に行った。曲輪群Aとそれを巡る帯曲輪周辺に13箇所(Tr 6~10・14~21)、曲輪群Bの曲輪10・23に5箇所(Tr 1~5)、堀切りIに3箇所(Tr 11~13)のトレンチを設定した。

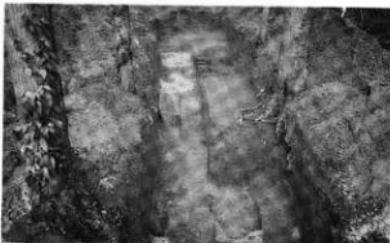
曲輪群A

曲輪28

この曲輪の入口は西側で、帯曲輪に伴う曲輪としては面的に広い。第16・17トレンチを設定。トレンチのいたるところで径30cm前後の柱穴を多数検出した。第16トレンチ西側に南面に切れる土庇と西面に切れる落ち込みを検出した。第17トレンチでは、中央部に南北に延びる土庇状遺構を検出した。深さ1.8m以上で断面杯型となり床面はさほど広くはない。その遺構の東側は大きな柱穴が検出され、西側では階段状となり、その床面さらにはその遺構床面で硬化面を確認した。何か特別な施設を備えていた曲輪と考えられる。位置的には城域の最先端にあり、また、曲輪の南側外に帯曲輪の通行を妨げるための土塁を設けているなど、防御(戦闘)主体の性格を持つ。遺物は少なく土師器杯や青磁類が出土している。



図版21 第19トレンチ



図版22 第20トレンチ



図版23 第21トレンチ



図版24 第21トレンチ

曲輪5

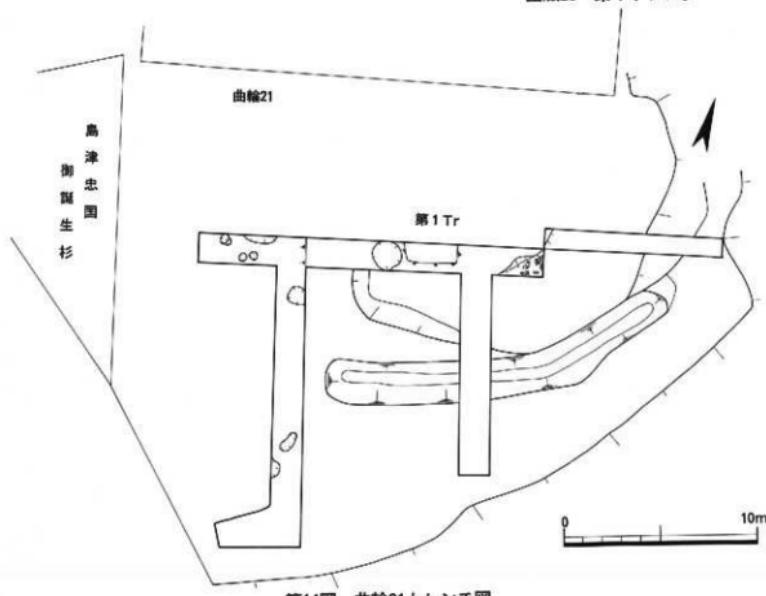
第19～21トレントを設定した。第19トレントでは東側に深く整地をしており、柱穴群を2枚の遺構面で検出した。柱穴の中には柱痕（径17cm）があり、何らかの施設が想定できる。第20トレントでも、3枚の遺構面からピットが検出された。さらにシラス面まで下げるにとて曲輪軸に平行するように床面の幅約4m程の落ち込み（通路）を検出した。その遺構の東面は壁が垂直にカットされ、西面は階段状になっている。第21トレントは、表土下、を剥ぎシラス面を出したところで遺構を確認した。トレント西側で南北方向に延びる溝を2本検出し、東側では土壠と落ち込みを検出した。西側の2本の溝は浅く、東側の溝では、銅鏡や土師器杯と共に焼礫がまとまって出土した。西側の溝は、青磁盤と土師器杯が出土した。そのほかのトレントからも土師器杯を中心に染付皿や青磁が出土して



図版25 第1トレント



図版26 第1トレント



第14図 曲輪21トレント図

いる。出土遺物の量は、曲輪群Bと比較するとかなり少ない。これは、建物等の存在は柱穴等で予想できるが居住空間としては、城域の中では非日常的意味合いが強い場所ではなかろうか。

曲輪1～3

第6～10トレンチを設定したが遺構は確認されず、遺物もごく僅かであった。他の曲輪と同様非日常的性格の曲輪である。

曲輪群B

曲輪10

主郭の東側に位置し主郭よりも一段低い曲輪である。そこに第2～5トレンチを設定した。第2トレンチと第4トレンチで東側への落ち込みを確認した。第3トレンチは、西側で南北方向に延びる小規模



図版27 第3トレンチ



図版28 第5トレンチ

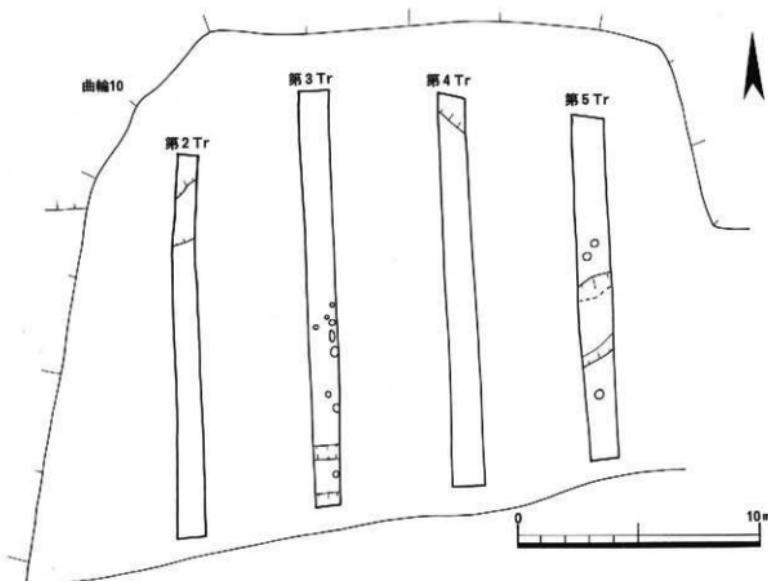
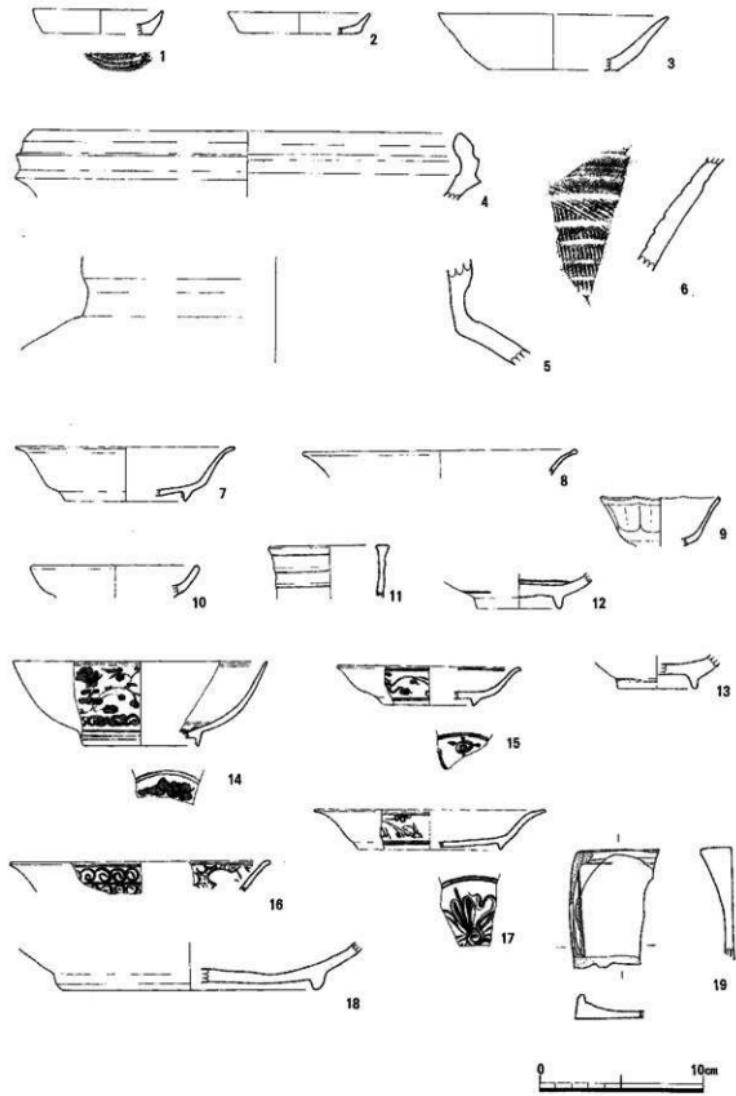


図15図 曲輪10トレンチ図



第16図 穂佐城跡出土遺物実測図

表-4 穀佐城跡出土遺物観察表

No.	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	焼成	胎土	備考
				口徑	底径 (高台径)	器高				
1	第3Tr 包含層 (曲輪10)	土師器	皿	8.2	6.8	1.45	④7.5YR 6/6 ④7.5YR 6/5 橙	堅	黑色粒を含む	糸切り底
2	第1Tr下層 (曲輪21)	土師器	皿	8.9	7.3	1.3	④7.5YR 6/6 橙 ④7.5YR 橙	堅	黑色粒を含む	糸切り底
3	第5Tr 包含層 (曲輪10)	土師器	杯	14.4	8.0	3.5	④10YR 8/4 浅黄橙 ④10YR 8/4 浅黄橙	堅	茶色粒を含む	
4	第1Tr上層 (曲輪21)	須恵質土器	擂鉢	26.6	—	—	④N 5/ 灰 ④N 7/ 灰白	堅緻	白色粒を含む	備前系
5	第13Tr (堀切り1)	須恵質土器	大甕	—	—	—	④2.5Y 4/1 黃灰 ④5YR 4/2 灰褐	堅緻	白色粒半透明粒を含む	備前系
6	第13Tr上層 (曲輪21)	須恵質土器	擂鉢	—	—	—	④10R 5/3 赤褐 ④10R 5/3 赤褐	堅緻	白色粒を含む	備前系
7	第21Tr (曲輪5)	白磁	皿	13.6	7.6	3.4	④10Y 8/1 灰白	堅緻	精良	
8	第1Tr上層 (曲輪21)	白磁	碗	19.0	—	—	④N 8/1 灰白	堅緻	精良	16C代
9	第2Tr包含層 (曲輪10)	白磁	杯	7.4	—	—	④7.5Y 8/ 灰白	堅緻	精良	15C代
10	第3Tr 検出面 (曲輪10)	青磁	皿	10.2	—	—	④7.5Y 6/1 綠灰	堅緻	精良	15C後～16中
11	第1Tr (曲輪21)	青磁	香炉	7.6	—	—	④7.5GY 6/1 綠灰	堅緻	精良	14C末～15中
12	第11Tr4層 (堀切り1)	染付	碗	—	5.2	—	④ ④2.5GY 8/1 灰白 外2.5GY 7/1 明オリーブ灰	堅緻	精良	16C末
13	第21Tr 包含層 (曲輪5)	染付	碗	—	4.8	—	④ ④10GY 7/1 明綠灰 ④10GY 7/1 明綠灰	堅緻	精良	
14	第5Tr 包含層 (曲輪10)	染付	碗	15.8	7.2	5.3	④10GY 8/1 明綠灰	堅緻	精良	福建省系
15	第19Tr (曲輪5)	染付	皿	11.4	2.4	2.8	④10GY 8/1 明綠灰	堅緻	精良	
16	第13Tr (堀切り1)	染付	皿	16.2	—	—	④10GY 8/1 明綠灰	堅緻	精良	16C前～中頃
17	第1Tr (曲輪21)	染付	皿	14.4	8.9	2.5	④10GY 8/1 明綠灰	堅緻	精良	福建省系 16C前～中頃 十字花文
18	第21Tr (曲輪5)	青磁	皿	—	15.8	—	④10Y 6/2 オリーブ灰	堅緻	精良	
19	第12Tr (堀切り1)	石製品	鏡	—	—	1.5	⑤Y 3/2 オリーブ黒	—	—	

な溝を2本検出し、その東側に径25cm前後の柱穴を検出した。第5トレンチは、トレンチ中央で浅い溝状造構（土壌？）を検出した。遺物は、土師器皿のほか、輸入陶磁器では14c末～16c中頃の青磁碗・皿や口縁部をアーチ状にカットした白磁（15c）、国産陶磁器では15cの瀬戸皿が出土している。

曲輪21

島津忠国生誕時に植えたと伝えられる杉がある曲輪で曲輪群Bの中でも一番低い曲輪である。そこに第1トレンチを設定した。東西に延びるトレンチを基本として、直角方向に西側へ2本のトレンチを補助的に掘削した。表土下、包含層は、少なくとも3層以上に分かれそれぞれピットや土壌等の造構を検出している。トレンチは、西側を3層目の包含層上面まで掘削し、他は包含層の1・2層目で造構を検出している。トレンチ東側では2層目で落ち込みがあり、1層目の包含層を形成する時点で今の地形になったものと思われる。遺物は、土師器皿や備前系の須恵質鉢・大甕のほか、瓦質土器の雑器類など、輸入陶磁器では14cの青磁香炉や16cの白磁碗、染付皿・碗などが出土している。造構からは建物等の存在が予想され、遺物からは、輸入陶磁器の種類の多さもさることながら須恵質や瓦質の雑器の多さは、生活空間としての曲輪の性格を明確にしているといえる。

堀切りI

曲輪群Aと曲輪群Bを分ける位置にあり防御性を高めている。第11～13トレンチを堀切りの断面と堀底の状況を観察するために設定した。第11・12トレンチは、長年の堀壁面崩落により土砂の堆積が深く現況より2.5m下げても底が確認されなかった。第13トレンチは堀底が確認され、底自体は、床面平坦で西側が一段高く段状を成している。遺物は、ほとんど曲輪群Bに伴う流れ込みのものと思われる。

まとめ

それぞれのトレンチの設定位置に伴う根拠は全くなく、樹木等を避けたものとなっている。そのため、トレンチ内で柱穴等が検出されてもその規模や性格を把握できていない結果となっている。ただ、遺物からは、その出土比率等でいくつかのことを追認する結果となっている。まず、曲輪群の性格については、曲輪群Bは曲輪群Aに比べて輸入陶磁器類（供膳用や調度品）や須恵質・瓦質の雑器類（調理具や日用具）の出土比率が高い。このことは、曲輪群Aは非日常的な空間とし、曲輪群Bに日常的な生活空間を求める結果であると解釈できる。そして、このことは曲輪自体が別々の機能を持つものとして考えられ、ただ、それだけを考えれば、機能分化された曲輪の集合体としての城館は、南九州では異質なものといえる。時期的な面では、14cから16c末のものが出土しており、これは、文献と比べた場合それを逸脱するものではなく、特に16c以降の遺物の出土が目立っているのもうなずけよう。

この調査は、当初は都市公園建設によるものであったが、この城館の重要性を再確認しつつある現在は造構を残したままの史跡公園としての在り方を検討するに及んでおり、調査方法や目的さらには規模等の変更をしていく必要がある。今回の調査は城域の4分の1程の区域しか実施されておらず、今後の調査拡大とその成果による史跡公園としての方向づけは、周辺地域の歴史研究と高岡町の文化財保護に対する積極的姿勢に対して正当に評価するものとなろう。

表-5

フリガナ	タカオカチヨウナイイセキ
書名	高岡町内遺跡Ⅲ
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編集者名	島田正浩
発行機関	宮崎県高岡町教育委員会
所在地	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
発行年月日	1995.3.31

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
イチリヤマ 一里山 ダイイチ 第1	高岡町大字 油之名字小 田元 4900-53	31° 79' 375	131° 12' 65625	高岡町	50m ²	町道改良	散布地	弥生	無	弥生式土器	
タカオカワモト 高岡麓	高岡町大字 糸田字前田 254-4	31° 70' 3125	131° 17' 965625	高岡町	15m ²	宅地造成 施設建設	散布地	近世	無		
チヨウハイデン 朝羽田	高岡町大字 糸田字朝羽田 818	31° 72' 5	131° 17' 965625	高岡町	100m ²	区画整理	散布地	近世	Pit	土師器 陶磁器	
スミゾノ 角ノ園	高岡町大字 糸田字角ノ 園 297	31° 70' 3125	131° 18' 19375	高岡町	100m ²	区画整理	散布地	近世	Pit	土師器 陶磁器	
ジョウガミキ 城ヶ峰	高岡町大字 花見見字東城 連 5434-2	31° 68' 125	131° 20' 93125	高岡町	50m ²	施設建設	散布地	縄文 弥生	Pit	興義武土器 弥生式土器	
コウジャクジ 香積寺	高岡町大字 高浜字梅元 323-2	31° 68' 125	131° 58' 05	高岡町	10m ²	施設建設	社寺跡	近世	無		
ダイノマル 大ノ丸	高岡町大字 高浜755-1	31° 68' 125	131° 18' 19375	高岡町	10m ²	建設施設	散布地	中近世	無		
ナベヤマ 鍋山	高岡町大字 高浜字根原 1318-1	31° 68' 125	131° 18' 19375	高岡町	25m ²	鉄塔建設	散布地	旧石器 縄文	無	焼瓦	
ムカシヨウ 穆佐城	高岡町 大字小山田 925-10外	31° 59' 375	131° 19' 5625	高岡町	60m ²	公園整備	城館	中世	Pit群 土塁	土師器付 染青白磁	

高岡町内遺跡Ⅲ調査報告書

1995年3月

編集・発行

宮崎県高岡町教育委員会

宮崎県東諸県郡高岡町大字内山

印刷 富士マイクロ株式会社